2013年度　　NB

国　語(B方式)

注　意

1. 問題は全部で10ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その2)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. **HB**の黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の ○ を塗りつぶしなさい。○で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

永禄五年(一五六二)三月五日、三好長慶は、飯盛城で(1)連歌の会をひらいていた。宗養だったか、紹巴だったか忘れたが、誰かが、「*すすきにまじる芦の*一むら」とよんだあと、一同がつけなやんでいると、長慶が、「古沼の浅きかたより野となりて」とつけて、一同の賞讃を博した(2)『三好別記』『常山紀談』)。

一説には、「すすきにまじる芦の一むら」は、「芦間にまじるすすき一むら」だったとも、「すすき一もと」だったともいうが、まあ、そんなことはどうでもいい。いずれにせよ、[A]生きた三好長慶は、右の一句によって、かれの生きていた転形期の様相を、はっきりと見きわめていたことを示した。かれ自身が、古沼の芦の一味だったか、野のすすきの一党だったかは、このさい、問題ではない。「古沼の浅きかたより野となりて」――おもうに、時代というものは、そんなふうに[B]移り変わって行くものではなかろうか。そして、転形期を生きた人々は、多かれ少なかれ、いずれも、「すすきにまじる芦の一むら」といったような――あるいはまた、「芦間にまじるすすき一むら」といったような[C]にたえずなやまされていたのではあるまいか。それかあらぬか、わたしには、「古池やかはづとびこむ水の音」という[D]の一句よりも、「古沼の浅きかたより野となりて」という長慶の一句のほうが、はるかにスケールが大きいような気がしてならないのだ。本来、池のほうが、沼よりも、スケールが大きいはずであるにもかかわらず、である。

それは、一つには、長慶の一句が、連歌の一部であるところからもきていよう。そこには、古沼ばかりではなく、古沼の原野に変わるあたりまで――そして、そのへんに生いしげっている芦やすすきの群落まで、ちゃんと視野のなかにはいっているのだ。近景から出発して、遠景にいたるまで、焦点深度のふかいレンズで、あざやかにとらえられているのである。わたしは、中世に栄えた連歌という一ジャンルが、いまは集団によって個性を圧迫する表現形式であるというので、棄てて顧みられないのが残念でたまらない。連歌師たちには、近ごろの文学者たちの忘れさってしまった共同制作、もしくは集団制作のよろこびがあった。そして、そのよろこびがあったおかげで、連歌は、*文学運動として、日本全国津々浦々にいたるまで、燎原の火のように、ひろがって行っ

たのではなかろうか。

なるほど、わたしもまた、文学運動と称するもののなかで、いくつかの連作の小説やエッセイを手がけた。そして、一つの作品を書いたあとで、つぎの作品にとりかかるさいには、できるだけいままでとは別の観点に立って表現しようと心がけた。つまり、いくらか連歌に学んで、［　E　］のおもしろさを出したいとおもったのである。しかし、いまだかつて、文学運動のなかで、共同制作をしたことはなかった。われわれは熱心に――ときに激烈に討論した。そして、ただ、それだけで、けっこう、運動をしているような気分になっていたものである。運動の究極の目的は、その運動に参加した全員の手によって、具体的な作品をつくり出すことであろうに。

しかし、制作は、つねに個人の手にゆだねられた。運動のなかから、多くの長編や短編の連作がうまれたが、いずれも個人の手になるものばかりである。それならば、わざわざ、運動の名のもとに、大勢あつまって討論に時間を空費するのは、かれらが、「すすきにまじる芦の一むら」であるか、「芦間にまじるすすき一むら」であるかをたしかめ合い、派閥をつくって、お互いに助け合うためであろうか。わたしは、文学運動のなかで、共同制作の問題で真剣に討論された例を知らない。そこにみとめられたものは、せいぜい、競作の意識だけだった。

さて、ここで、ちょっと一言、わたしの連作の動機についてふれておこう。わたしが、運動の機関誌ばかりではなく、いっぱんの商業雑誌にも、連作を書きはじめたのは、わたし自身を、いくつにも分裂させて、それらのたくさんのわたしによって、共同制作まがいの作品を書こうとしたためだけではない。書きおろしのばあいにせよ、新聞や雑誌に分載するばあいにせよ、わたしには、長編を書き続けていると、いつの間にか、(3)サラリーマン化してしまうような気がしてならなかったからだ。一定の収入があるのは、けっこうだ。しかし、初任給に毛のはえたていどの収入で、一出版社に隷属するのは真っ平だというのが、わたしの偽らぬ心境だったのである。連作なら、いつでも好きなときに中断して、続きを、ほかの場所に書くことができる。短編では、初任給以下である。しかも、共同制作の［　F　］さえいだくことはできないのだ。

要するに、わたしは、かつての連歌運動のように、共同制作というものにいささかも興味を示さない、きわめて個人主義的な今

日の文学運動に絶望しているのである。わたしは、討論ばかりしていても、なんの役にもたたないとはおもわない。討論の結果を総括して、一人が書く習慣に不満なのだ。なぜ討論に参加した全員が書かないのか。そして、なぜ評論の領域で、共同制作の実をあげようとしないのか。運動の機関誌のスペースがかぎられていることは問題にならない。そのときは、ほかの場所で書けばいいのである。そんなふうにして、運動というものは、ひろがって行くものではあるまいか。

連作は、とうてい、共同制作の［ G ］には及ばない。(4) わたしは、わたしの連作を、一作ごとに、わたしとは別人に変身して書くというが、それは、主観的に、わたしが、そうおもいこんでいるだけのことであって、客観的にみれば、たぶん、それらの作品からうかびあがってくるのは、いっこう、変わりばえのしない、わたし自身の孤独な顔だけであろう。

『西遊記』の主人公である猿が、危機にのぞんで、自分のからだから、一つかみの毛をむしりとって、フッとふくと、毛は無数の猿に変身して(a)如意棒をふるってたたかいはじめる。あるとき、わたしは戯曲を書き、まるでわたしが、その主人公の猿になったような気分を味わった。戯曲のおわったところから演劇がはじまる。わたしは、はじめて舞台稽古に立ち会って、これこそ、多年、わたしの夢想していた共同制作というものではなかろうかとおもった。なるほど、それは共同制作にちがいなかった。そういえば、映画もラジオもテレビも、ことごとく、共同制作であって、文学のように、たった一人で制作されてはいない。

そのうち、しだいにわたしの演劇熱はさめはじめた。文学運動のばあいは、まず、［ H ］にとらわれない個人というものがあって、それらの個人によって、一つの集団が形成される。しかるに、演劇運動のばあいは、最初に［ H ］にとらわれた集団があって、そこから自由な個人が、ようやく独立していく段階にさしかかっているところらしかった。つまり、一言にしていえば、演劇運動は、文学運動ほど、民主化されてはいないのである。もっとも、わたしの演劇における共同制作に決定的な終止符を打ったのは、ある演劇研究所の試演で、わたしの戯曲のなかの馬が、六本足で登場するのをみて以来のことだ。それは、たしかに［ H ］にとらわれない試みにちがいなかった。しかし、六本足の馬には、はじめてお目にかかったので、演出者にそのわけをきいてみると、かれは、さばさばとした顔つきで、二人の馬の足では、胴体が重くて、とうてい、持ち上がらないので、一人、馬の足をふやしただけですと答えた。

とすると、ここらで、もう一度、冒頭へかえって、「古沼の浅きかたより野となりて」という長慶の一句をとりあげ、景色の移り行く順序を、再確認して置く必要があるであろう。まず、［　I　］がある。［　I　］のまわりには［　J　］がある。つぎに、［　K　］があらわれる。いつの間にか［　L　］のけはいがただよいはじめたのだ。それから、［　M　］が続き、やがて［　I　］の影響は、まったく消えさり、最後には、風がふくたびに、いっせいに波たち騒ぐ、ぼうぼうたる［　N　］になる。繰り返していう。これが、転形期の風景である。

しかるに、これまでわたしが、そんな移行形態には目もくれず、文学運動のなかで、埋没の精神にてっし、無名の文学者として終始しながら、共同制作をしようと呼びかけたのは、(5)あまりにも非歴史的だったといわなければならない。われわれはまだ古沼のすぐ近くでざわめいている、［　K　］かもしれないのだ。「天明狂歌師はその狂名の中に不在である。すなわち、無名人格である。いいかえれば、(b)読人不知ということにほかならない。かつて芭蕉俳諧の連歌は、世界が出来上がった時、作者の名を忘れさせた。いま、*万載狂歌集は作者が名を放棄することから世界を築き上げている。」と石川淳はいった（『江戸人の発想法について』）。しかし、賢明にも、かれは「*歌仙」のなかで独吟を試みただけであって、文学運動のなかで、共同制作をしようとはしなかった。つまるところ、その独吟は、質を問わなければ、わたしの連作のようなものであろう。

いまはまだ、共同制作をするために集まって、前人未踏の文学運動をはじめるには時期尚早であろうか。天明（一七八一～八九）の狂歌運動のように、無名の文学者たちによる共同制作が不可能なら、有名な文学者たちのそれでも我慢したいとおもうが、如何なものか。あらためてことわるまでもなく、連歌をつくるのではない。たとえばジョイスの『*ユリシーズ』のような小説を、日本の有名な文学者たちの連作によってつくり上げ、いわば、『オデュセイア』の俳諧化を実現しようというのである。うまく行けば、石川淳のいうとおり、その連作は［　O　］、完成と同時に、作者の名を忘れさせてしまうので、無名の文学者たちの手がけたときと変わりはない。まずく行けば、「六本足の馬」のような作品ができ上がるかもしれないが、それはそれなりに、われわれにむかって、異常な衝撃をあたえるのではあるまいか。

いずれにせよ、なお、依然としてわたしは、共同制作を、みずからの課題とする文学集団の出現を待っている。なぜなら、わた

しには、共同制作をする意欲のない作家や評論家たちの文学運動は、運動の名に値しないような気がしてならないからだ。大勢の文学者たちが進んであつまる以上、かれらは協力して、そこからなにかモニュメンタルな作品を創造するのが当然ではなかろうか。それとも文学というものはあくまでたった一人で書かなければならないものであろうか。

（花田清輝「古沼抄」による）

＊すすき　イネ科の多年草。主に山野に群生する。
＊芦　イネ科の多年草。主に水辺に自生する。
＊文学運動　筆者の花田清輝は、戦後の集団的文化運動の機運のなかで「総合文化協会」「夜の会」「記録芸術の会」などを作り、これらはジャンル横断的な文化運動や前衛芸術運動の拠点となった。
＊万載狂歌集　天明期江戸狂歌の最初の撰集の一つ。
＊「歌仙」　石川淳の作品。一九五二年発表。
＊『ユリシーズ』　ジェイムズ・ジョイスの小説。二十世紀モダニズム文学のなかでも最も重要な作品の一つといわれる。十八の章から構成され、それぞれが古代ギリシャの英雄叙事詩『オデュッセイア』に対応している。

問一　傍線部(1)「連歌の会」とあるが、連歌の説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 1 。

① 主として八・八・八・六音からなる形式。
② 発句、連句、俳文などをまとめて呼ぶときの呼び方。
③ 五音と七音の二句を交互に繰り返し、最後を七音で止める形式。
④ 俳諧の連歌の発句を独立させたもの。
⑤ 五・七・五と七・七を一人または数人で詠み連ねる形式。

問二　傍線部(2)「『三好別記』『常山紀談』」の該当部分は概ね次のごとく記されている。この内容を説明したⅰ～ⅴで正しいものには①、間違っているものには②を選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 2 ～ 6 。

「連歌の会ありて、長慶、冬康、宗養、紹巴など列座す。(その途中に長慶の弟である三好実休が討ち死にしたという報告が届いた)長慶一見して懐中し、座を不レ動、色を不レ変。時に傍人「芦間にまじるすすき一むら」と云々。座中つけわづらひしに、長慶、「古沼のあさきかたより野となりて」とありしかば、諸人皆入レ興」(『三好別記』)

「三好実休討ち死にの時、長慶は飯盛にて連歌せしに、(討ち死にしたという報告を)告げ来る。「すすきにまじる芦の一むら」といふ句、人々付けわづらひたりしに、その書をひらきてとかくをいはずさしおき「古沼のあさきかたより野となりて」と付け終りて、さて実休討ち死になりと告げ来たれり。今日の連歌、これにて止むべしとて、さて兵を出されしとなり」(『常山紀談』)

ⅰ　「すすきにまじる芦の一むら」という前句(ここでは七七)をよんだのは、紹巴だった。解答欄番号は 2 。

ⅱ　「古沼のあさきかたより野となりて」という付句(ここでは五七五)は長慶が作った。解答欄番号は 3 。

ⅲ　『三好別記』と『常山紀談』の記す前句は違っているが、付句は同じである。解答欄番号は 4 。

ⅳ　『三好別記』は実休戦死の報を受けても長慶は動揺しなかったとするが、『常山紀談』は長慶の動揺を記している。解答欄番号は 5 。

ⅴ　『三好別記』は長慶の付句を皆が賞讃したと記すが、『常山紀談』はそこまでは言及していない。解答欄番号は 6 。

問三　筆者がこの文章を書いた時期、一般的に連歌はどのようなものとしてとらえられていたか。文中から二十五字以内で抜き出せ。以下、字数制限のある設問はすべて句読点を含む。解答用紙(その1)を使用。

問四　前後の内容から考えて空欄 A に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 7 。

① 短く終わった平穏無事な時代を
② いまだ洗練した文芸が成立していないなかで
③ 身分制度が固定していた時代を
④ 中世の暮れ方から近世の夜明けまでを
⑤ 武士の一生にふさわしい戦いの時代を

問五　空欄 B に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 8 。

① 気がつくと
② 徐々に
③ 季節が移りゆくように
④ 荒涼たるさまで
⑤ 急転直下

問六　空欄 C に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 9 。

① 違和感　② 懐旧の思い　③ 孤独の感　④ 郷愁の思い　⑤ 矜持の念

問七　空欄 D に入る人名を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 10 。

① 芭蕉　② 蕪村　③ 曽良　④ 一茶　⑤ 去来

問八　空欄 E に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 11 。

① 戯曲　② 人生　③ 議論　④ 転調　⑤ 競作

問九　傍線部(3)「サラリーマン化」とあるが、筆者はこれをどういうことだと考えているか。文中の語句を使って、四十字以内で説明せよ。解答用紙(その1)を使用。

問十　空欄 F に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 12 。

① 渇望　② 懸案　③ 失望　④ 徒労　⑤ 幻影

問十一　空欄 G に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 13 。

① 千変万化　② 広大な視野　③ 内的充実　④ 長期的展望　⑤ 大衆的人気

問十二　傍線部(4)「わたしは、わたしの連作を、一作ごとに、わたしとは別人に変身して書く」とあるが、これを五十字から六十字程度の別の表現で述べている部分を二か所、文中から抜き出し、それぞれ最初と最後の七文字を記せ。解答用紙(その1)を使用。

問十三　空欄 H に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 14 。

① 因習　② 発想　③ 論理　④ 運動　⑤ 集団

問十四　空欄 I に入る語句として最適なものを次の①～⑥から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 15 。

① 古沼　② すすきにまじる芦の一むら　③ 芦間にまじるすすき一むら
④ 原野　⑤ 芦の群落　⑥ すすきの群落

問十五　空欄 J に入る語句として最適なものを次の①～⑥から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 16 。

① 古沼　② すすきにまじる芦の一むら　③ 芦間にまじるすすき一むら
④ 原野　⑤ 芦の群落　⑥ すすきの群落

問十六　空欄 K に入る語句として最適なものを次の①～⑥から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 17 。

① 古沼　② すすきにまじる芦の一むら　③ 芦間にまじるすすき一むら
④ 原野　⑤ 芦の群落　⑥ すすきの群落

問十七　空欄 L に入る語句として最適なものを次の①～⑥から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 18 。

① 古沼　② すすきにまじる芦の一むら　③ 芦間にまじるすすき一むら
④ 原野　⑤ 芦の群落　⑥ すすきの群落

問十八　空欄 M に入る語句として最適なものを次の①～⑥から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 19 。

① 古沼　② すすきにまじる芦の一むら　③ 芦間にまじるすすき一むら
④ 原野　⑤ 芦の群落　⑥ すすきの群落

問十九　空欄 N に入る語句として最適なものを次の①～⑥から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 20 。

① 古沼　② すすきにまじる芦の一むら　③ 芦間にまじるすすき一むら
④ 原野　⑤ 芦の群落　⑥ すすきの群落

問二十　傍線(5)「あまりにも非歴史的だった」とあるが、これを別の語で言い換えた表現は次のどれか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 21 。

① 無名人格　② 前人未踏　③ 津々浦々　④ 読人不知　⑤ 時期尚早

問二十一　空欄 O に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 22 。

① 蕉門の連歌のばあいのように
② 江戸人の発想のように
③ 天明狂歌師のばあいのように
④ 埋没の精神にてっすることで
⑤ 共同制作のよろこびによって

問二十二　次のア～オのそれぞれについて、筆者の考えと一致するものは①、一致しないものは②を選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 23 ～ 27 。

ア　連歌運動が広まったのは人々が共同制作のよろこびを忘れていなかったからである。解答欄番号は 23 。

イ　芸術は過去にとらわれない自由なる主体としての作者による換え難い個性の表現である。解答欄番号は 24 。

ウ　歴史は過去から未来へと連続的に進むのではなく、なんらかの決定的切断を挟んで抜本的に変容する。解答欄番号は 25 。

エ　個人を単位とする近代的な主体概念と結びついたジャンルとしての小説は近いうちに消滅するだろう。解答欄番号は 26 。

オ　集団は個人の自由を抑圧するが、同時に個人では考えることもできなかったものを創り出す。解答欄番号は 27 。

問二十三　二重傍線部(a)「如意棒」の読みをひらがなで書け。解答用紙(その1)を使用。

問二十四　二重傍線部(b)「読人不知」の読みをひらがなで書け。解答用紙(その1)を使用。

問二十五　防ぎ止めることができないほど勢いがある様子を表現した比喩を文中から抜き出せ。解答用紙(その1)を使用。

問二十六　単独で詩歌を作ることを意味する語句を文中から抜き出せ。解答用紙(その1)を使用。